

七〇数年生きてきて、一貫して大事にしているこ

とは、「行った先々で、自分のやりたいことがち

よつとはできてるかい」という問いです

語り手 春日井 敏之（元教育相談スーパーバイザー）

聞き手 石岡 春蔵

学生時代のこと

—学生時代とか。僕、今サッカー部ですけど、どんな部活とかやられてましたか？

学生時代っていうのは、いつの頃？中高？

—中高ですね。

僕、中学校ではバスケット三年間やったよ。キャプテンしてた。岐阜の恵那というところの中学校で。

—すごいですね。キャプテン。

生徒会長もやってたよ。

—兼任って難しくなかったんですか？

いや別に、両方活動場所違うもん。

—キャプテンしていて、チームメイトのいざこざとかあったりしたんですか。

ないよ。仲良くやってたよ。でも高校はね、結構本格的にやるじゃん。同好会みたいな雰囲気じゃないから。高校は二年で、生徒会副会長

もやって、校則の見直しとかやってたから、途中でバスケットは一区切りにしたかな。でも、文芸部が潰れそうになって。新入生歓迎の時期に、お昼休みの時間、昼食の時間に、毎日各教室まわって、一〇クラスぐらいあった一年生。教卓で、一緒に弁当食べながら、「文芸部ってのがあるんだけどさ」とか言って、「こんなことやってるから、興味のある人来てください」とか言って。そしたら、三〇人ぐらい来たよ。

—三〇人（驚き）

で、文芸部復活したいみたいなことをしてた。

—廃部の危機を救ったんですか。

それで、バスケットは一区切りで、文芸部復活で、生徒会の本部役員をした。

—大活躍ですね。

みんなと一緒に楽しんでやってたよ。

*

—中高生徒会長してて、困ったこととかなかったですか。

中学校は会長、高校は副会長ですけど。困ったことって。別にないよ。やりたいことをみんなでやろうっていう発想だから。

—なるほど。

校則の見直しをやるうとか。あと、高校では、お昼に販売に来てるパン屋さんがあんまり美味しくないという生徒の声があって、パン屋さんを変えようという要求が生徒会に出て。じゃあ、市内のパン屋さん四か所あったから、一週間ごと試販に来てもらって。で、各学級で話し合いして、どこのパン屋さんがいいか決めて、生徒総会で決定した。そして、今までのパン屋さんと違うパン屋さんになって。今までのパン屋さ

んが設備投資もしてきたのに、それは困るって学校に要請があつて。だけど、その時の生徒会担当の顧問の先生が、後で聞いたんだけど、教員会議でも議題になったけど、「これは生徒会の自治の問題だから。俺はお前たちの決定を尊重したい」って言うてくれたんだよ。

―めっちゃめっちゃいい話ですね。

僕らの決定を尊重してくれて、そういう中で僕は自治活動とか、生徒会の意味とかを学んできたよ。

―教員との関係も良好だったりとか。

良好だったよ。いろんな知恵を貸してくれたよ。

―話す時のコツとかありますか。人とコミュニケーションをとる際の。誰に話すとき。

―教員に教えてもらったりするときに、こうした方が聞きやすくなるかとありますか。

いや、なんか一緒に相談するという姿勢かなあ。なんか、教えてやるとか、ひたすら教えるとかそういう上下関係じゃなくて、このことをどういうふうにしたらうまくいくなっていうのを先生と生徒が一緒に考えると、生徒同士が生徒会の役員として一緒に考えると、そのプロセスが大事な気がします。

―プロセス。過程が重要なんですね。それじゃあ、中学校、高校とかの生徒会とかやってて、そういう経験が大学とかの選ぶ基準にもなったんですか。

だから進路も自分で決めたよね。大学行くときも、僕ははじめ先生に「お前教師に向いてるから教師になったら」って言われて、その気になって「教育学部行こう」とか言ってやってたけど。高三の時に司法の独立をめぐるいろんな社会問題が起きてて、その時に『司法権の独立』

という京都の出版社が出した本を、たまたま岐阜の通っていた高校からの坂道を下ったところにあるちいさな本屋さんで見つけたの。その本を書いたのが、当時立命館の末川博名誉総長、山下健次、畑中和夫っていう憲法の先生だったの。僕、それ読んで、あ、この先生たちのいる大学で法律の勉強をして、弁護士になりたいと思ったんだよ。それで進路変えて、間に合わなくて一年浪人して行つたわけ。当時、私学の中で授業料が一番安かったから、奨学金をもらいながら行けた。

―そうなんですか。

立命館が全国の私学の中で一番安かった。年間授業料が六万円余りだったよ。

―ええ（驚きを隠せなかった）

一九七三年から、四年間在籍してました。

―今と一緒のお金の単位ですか。

そうだよ。四年間据え置きだったの。途中で国立が一月一万円になつて、年間一二万円になつて、一瞬国立よりも安かった。

―そんな、そんなに。

多分そのままだと財政的にも厳しくて、立命館は危うかったと思うの。で、僕らが卒業後の一九七九年に学費の大幅改定をしたんだよ。それは四年間据え置きじゃなくて、値上げをするときに在校生も値上げをしていくっていう方針に変えたの。で、四年に一回は見直そうっていう仕組みを作つていった。

―政策にも見直しが必要ってことですね。

そう。こうした取り組みの中で、「立命館大学全学協議会」っていう制度が生まれて、理事会だけではなく、学生や教職員と一緒に相談をして学園づくりをしていくことを大切にしてきた。

—なんか似ていますね。教員と生徒が相談するみたいなの。さっきの話。

そう。だから、中学・高校で学んだ自治の精神みたいなのは、大学行つた時も自治会の役もしたし。それから、法学部だから、法学会についてのがあつて、法学部の先生と学生が一緒になつて教育・研究について議論をしてきた。その法学会の学生委員会の委員長をしてたよ。

—引つ張る立場のことが多いですね。

それは、中学・高校で学んだことが生きてたんちゃうかな。

—経験つてのは力になりますかね。

なると思うよ。人間、生きてる中でやつたことで、そう無駄なことはないから。無駄に見えることも、いろんなところで役に立つと思うよ。

—僕も今回の経験を踏まえて、もうちょつと頑張ります。

うん。いろんな失敗付きの練習ができる場が「学校」なんだから、いろいろやつたらいいじゃない。

*

恋愛と綴ること

—失敗とかつて、なんかああすればよかったみたいな後悔とかつてありましたか。今まで。

例えば進路の希望は、成長する中で何度か変わってきたね。挫折というよりも、悩みながら自分で変えてきた気がする。でも、その時の目標に向かつてやつて得た力は、希望が変わつて次の目標に向かった時に役に立ったかな。だつて、弁護士になろうと思つても、ロースクールなんか当時はなかったから、みんな浪人してやつてたわけ。三十歳前に弁護士になれたら優秀やみたいなの。合格率二パーセントだった。

—二パーセント。

そう。当時の司法試験ね。で、四回生終わつて、大学院にも関心があつて、でも当時研究者養成の博士課程しかなかったから、誰も現役で受かんなくて、また一年「プー太郎」して、浪人生三人でグループ組んで、憲法と行政法と英語の勉強をしてたよ。バイトしながら。

—英語とか必要ですか。

うん。もう忘れちゃったけどね。それから、大学院受験の直前に憲法ゼミの大久保史郎先生から、「春日井、教員免許持ってたやろ。採用試験受けへんのか」って言われて。「あ、一度受けてみます」つて一ヶ月間猛勉強して受けたら受かった。

—すごい。

京都府の中学校社会科の採用試験、五〇倍だったの。

—五〇倍。倍率高いですね。

四五〇人受けて九人しか受かんなかったから、二パーセント。司法試験も合格率二パーセントだから、単純な比較はできないけど、これはご縁のあつたところで頑張ろうつて思つて教員になった。その時に、結婚したいパートナーもいたから、愛を選んで働くことにしたわけ。

—かつこいい。

だから、教員になつて一年目の秋に、後輩や同級生が実行委員会形式で結婚式やつてくれたよ。五〇〇〇円の会費制で、京都でやつた。

—五〇〇〇円（驚き）

そう、会費五〇〇〇円で結婚式やつてくれた。その時、ゼミの大久保先生が立ち会人をやってくれたんです。「仲人第一号や」つて。

—今も、やつぱ夫婦円満なんですか。

—そうだよ。

—円満のコツとありますか。

まあ、中学校の時の生徒会長と副会長からの付き合いやからね。

―繋がってますね。

それから、十一年間付き合って結婚した。その間、千葉大と立命館大と遠距離だった。

―当時、電車でどれくらいだったんですか。新幹線はあったっけ。

新幹線はあったよ。一九六四年、新幹線は東京オリンピックの時にできたから。月に一回会いに行ってた。時には、一日だと二食で頑張ってた。交通費作って。だから行きたいときは早く会いたいから、新幹線。帰りは離れがたいから、東京駅夜一〇時発のドリームバス。

―当時も夜行バスとかあったんですか。

よく利用したよ。あとは、携帯とかないから手紙書いてた。

―いいですね。

四年間で交わした手紙が合計四〇〇通。

―え。四〇〇通。

お互い番号つけて出してた。一番送ったら二番が返ってくるわけ。

―いいですね。最高ですね。

そこで僕、多分書く力が身についたと思うよ。

―今、その書く力生きてますか。

生きてる。やっぱ自分の言葉で一番伝えたい人一人を想定してちゃんと書く。論文の考察も同じだと思うよ。

―思いを言葉にする力ですか。

思いを言葉に託すから。たとえば、四季の景色の移ろいを言葉にしているとかなんとか伝えたいっていう自分の感性も磨かれた気がする。

―その感性が磨かれて発揮されたと感じるのですか。

だって、京都にいて、四季折々の豊かな季節の変化を、伝えたいなと思うじゃない。今みたいにSNSもないしき。写真添付もないし、言葉で伝えるしかないんだ。携帯がなかったんだから。

―本当だ。難しそう。

一〇円玉の電話機しかないんだもん。

―言語化すごいですね。

だから余計に書くということ。それから、直接会いに行くみたいなのが大事だったな。

―直接会いに行くか。いいですね。

＊

岩崎校長との関わり・開校の頃

―岩崎校長とどんな繋がりがありますか。校長はよく始業式とか、そういうのしか目にしないですけど。

岩崎先生、前は立命館宇治高校におられた。もっと言えば、その前身の「宇治高校」の頃からの先生だよ。僕は、近くの中学校にいたから、そのころから岩崎先生のこと知ってるよ。それから、二〇〇一年に立命館大学文学部に着任して以降、依頼を受けて附属の慶祥中学・高校以外の四つの附属小中学校でのケース会議、事例検討会のスーパバイザーを毎月一回ずつ行ってきたから。立命館宇治中学・高校でも一緒にいろんな仕事をしたよ。

立命館守山中学・高校もできた時から行ってたよ。近江兄弟社高校に来て、一区切りにしたけど。立命館守山中学・高校の開校当初、前身の守山市立守山女子高校の生徒たちが、「私たちの守山女子高校がなくなる」って不安定になって、その時に依頼されて、生徒に話しに行つたよ。二月か三月くらいだったかな、旧校舎の木造の体育館で。「君たち

が学んだ母校の歴史はなくならないよ」って。「僕らは、君たちの思いと蓄積されてきた歴史をちゃんと受け止めて、守山女子高校がここにあったっていうことをちゃんと伝えていくよ」って話しました。だから、中学校の校舎の一階に守山女子高校のコーナーがあるじゃないですか。それは、当時の在校生や卒業生たち、市民の思いや歴史を継承してこういう経過の中で設置されてきたんだよ。だからこそ、これからも大事にせなあかんね。

*

現在とその原点

立命館宇治中学・高校も二〇〇二年からケース会議に行ってたし、現在は、立命館小学校と立命館中学・高校に、ここで仕事しながら毎月行ってるよ。

—すごい働きますね。

—そうだね。春日井が三人ぐらいいないと回らないよ。

—よくぞ一人で。

—それで、宝塚市の教育委員もしてて、毎月二回近江八幡から宝塚まで高速を走ってるよ。

—近畿どこにでもいるような感じがしますね。

—昨日は大阪で研修講座やってきたよ。私学経営研究会っていう、私学立の小中高大の経営者などが参加してる研究会で、いじめとハラスメントの問題について依頼があつて報告をしてきたよ。

—思春期・青年期とか、やつぱりそういういじめに対する対策とかは、難しいところがあるんですか。

—そうだね。いじめが起きないような学校にどうしたらいいかなって。モグラ叩きじゃなくてさ、予防が大事だよ。それと初期対応が大事だ

よね。その中で、特に子どもへの対応と同時に、保護者の方への対応も大事だよ。そんなようなことを昨日も話してきたよ。だから、中学校にいる時には、「不登校の親の会」を宇治の地域で立ち上げて、今も続いているよ。もう八五〇回以上やってるよ、一九九一年から。

—どれくらいの頻度ですか。

—初めは週一回やってたけど、毎週。今は世話人や代表者も変わって、月一回やってるよ。だから、この親の会で、お母さんやお父さんたちから学んだことたくさんある。

—例えばどんなことですか。

—「不登校の子どもが家でどんな様子で、どんなことに苦しんで、あるいは保護者がどんなことを辛いと思ってるか」とか。たとえば、学校から、「なんでお送り出してもらえないんですか」と責められたり、

「親子でちゃんと関わってもらってますか」みたいな見方をされることがあるじゃない。そういうことの辛さが、話を聴いてよくわかったよ。それから、親の会のフラットな関係が心地いいよね。先生と保護者じゃなくて。春日井さんっていう関係。誰々さん。僕もそのうちの一人。

—人の横の繋がりが。

—そうそう横の繋がりが。それで、学んだことたくさんあるよ。時々、当事者も参加して語ってくれるから。そこから、子どもの気持ちってこんなやなって、伝わってくることもたくさんあった。

—春日井さんは、いろんな立場、さつきも話しましたが、先生と生徒とか、そういう不登校の生徒だけじゃなくて、その生徒の親とか、いろんな立場の人の意見から結構取り入れたり、学びとかあったり。

—そうだよ。だから、子どもが一番大事なパートナーだけど、子どもだけじゃなくて、保護者もそうだし、同僚もそうだし、あるいは、学校

の外のいろんな研究会、学会の仲間もそうだしね。ちょうど八月九日、一〇日も、京都の平安高校で、日本学校教育相談学会の全国大会やるんだよ。その会長も四年間してきたよ。

― 一気にやって、なんかあつて頭こんがらかつたりしないんですか。

そう、時々予定が抜けちゃつてごめんなさいとかもあります。そんな中で、実践研究を書くということも大事にしてるよ。(本を見せて) これは大学行つて不登校をテーマにまとめた『思春期のゆらぎと不登校支援』。学会の仲間と一緒に作った本もあるよ。『大学でのピアサポート入門』とか。今年出版したのは、『学校教育相談―理論と実践のガイドブック』。これは、一九人の仲間の力を結集して一緒に書きました。これまでの人生のなかで、一番忙しかったんだけど、去年だけで、七本原稿書いたよ。

― な、七本。

そう、たとえば、これは学校教育相談学会の学会誌『学校教育相談研究』なんだけど、「子どもの権利と教職員の聴くという関わり―不登校の捉え方と支援を切り口に―」というテーマで、論文を十二ページ書いたよ。先生たちの校内研修では、まず「聴くということ」をテーマにしたよ。先生たちには、「子どもの話を聴くときに大切にしてきたこと」「これからの自分の課題」を全員に書いてもらつて、冊子にして共有したよ。生徒会の生徒三〇人余りにもアンケートしたよ。「今まで話を聴いててもらつてよかったって思ったのはどんな先生」「この先生に相談するんじゃないかって思ったのはどんな先生」っていう内容で。これもまとめて、全部先生に返したよ。こんな内容だったよ。

― 高校生の声を。

これらをもとにして、「聴くということ」について、校内研修をやったんだよ。具体的には、四人グループで「子どもの話を聴くときにどんなことを大事にしていたらいいかな」って、「今後の自分の課題は何か」ってことをグループで話し合ったわけ。

それから、学校風土の可視化・見直しが課題になってるんだけど。僕は、毎年取ってる生活アンケートの項目に、「どんな学校を求めていますか」「どんな先生を求めていますか」「近い将来どんな人になっていきたいですか」の三つの項目を提案して了解を得て実施してもらいました。自由記述で回答してくれた八〇〇名余りの結果を全部読んで、ページに一問ずつまとめて先生たちに返しました。

こういうのって子どもの声だから、ちゃんと返さなアカンでしょう。いろんな機会に、子どもたちにも返したよ。こんなことを、今できる範囲でやってる。だから、これまで七〇数年生きてきて、一貫して大事にしていることは、「行つた先々で、自分のやりたいことが少しはできるかい」っていう問いです。

― 自分に対してですか。

そうだよ。今は、たまたま校長という立場だけど、一つ目は「そこで自分がやりたいことができてるか」ってこと。二つ目は「それが少しは誰かのための役に立ってるかい」ってこと。そして、三つ目は、「そこで、子どもや同僚や保護者から学んだことをちゃんと返してるかい」ってこと。その場が、僕にとっては「書く」ということです。あるいは、「講演、研修する」ということです。

―あ、お時間大丈夫ですか。

そうですね。じゃあ、ぼちぼち終了ということ。

―はい。ありがとうございます。

今日はありがとうございます。

―最後に写真を一枚撮りたいんですが。大丈夫ですか。

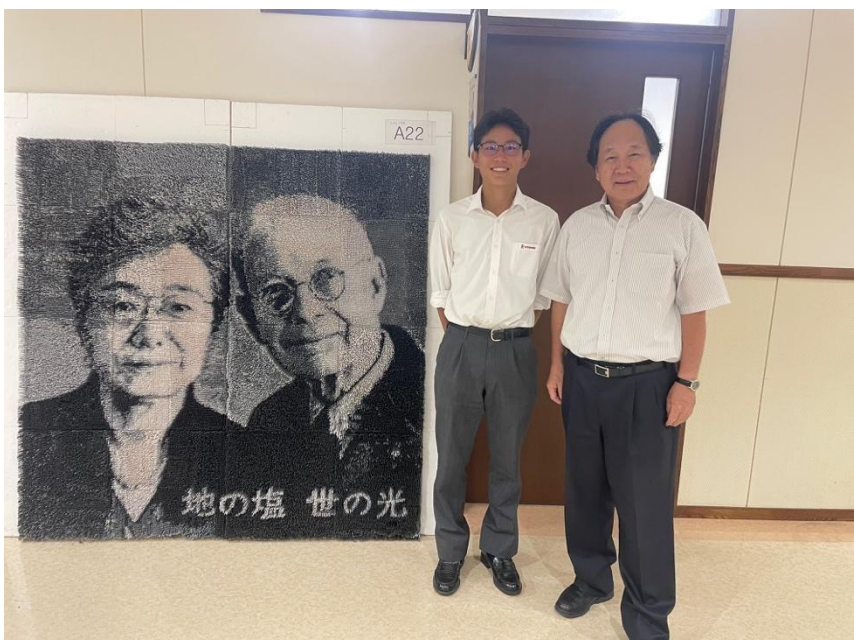
もちろん、大丈夫だよ。

―今日はありがとうございました。

こちらこそ、ありがとうございました。

感想

今回の取材を通して、自分の無意識な先入観が大きな壁を作っているなど感じました。先生と生徒、親と子どもなど、縦の関係を意識し過ぎており、教えてもらう、教えてあげるなど、どこか差を作っていたことを知り、横の関係を意識することにより、自分も周りもより良い関係を築いていけると感じました。また、立命館守山がまだ女子高校だった時のお話を聴いて、受け継いでいかなければならないものがあると強く感じ、大切にしていきたいと思いました。



右…語り手 春日井 敏之さん

左…聞き手 石岡 春蔵

（春日井さんが学校長をしておられる近江兄弟社高校の生徒が爪楊枝で制作した作品「ヴォーリズ学園創始者」の横で）